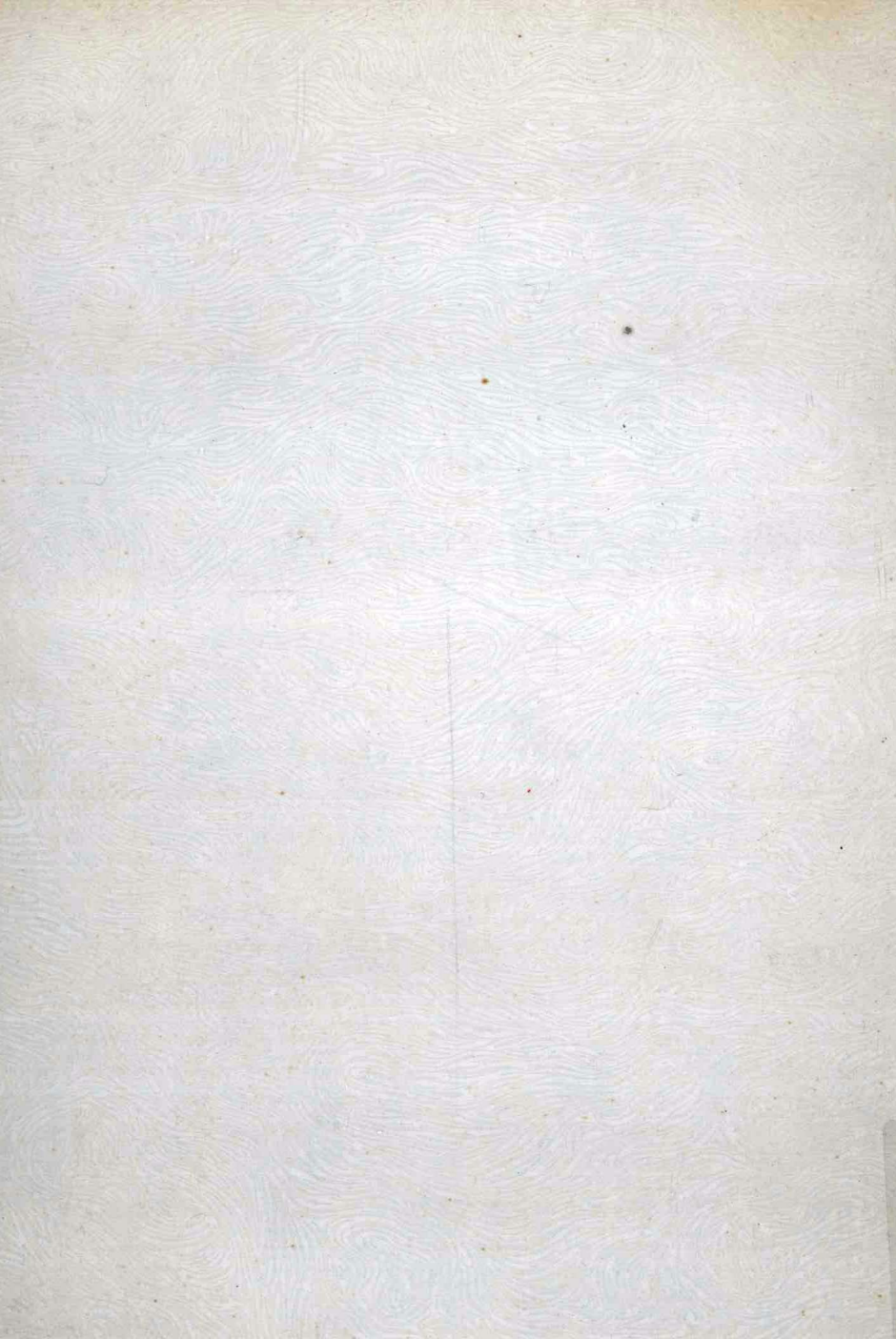
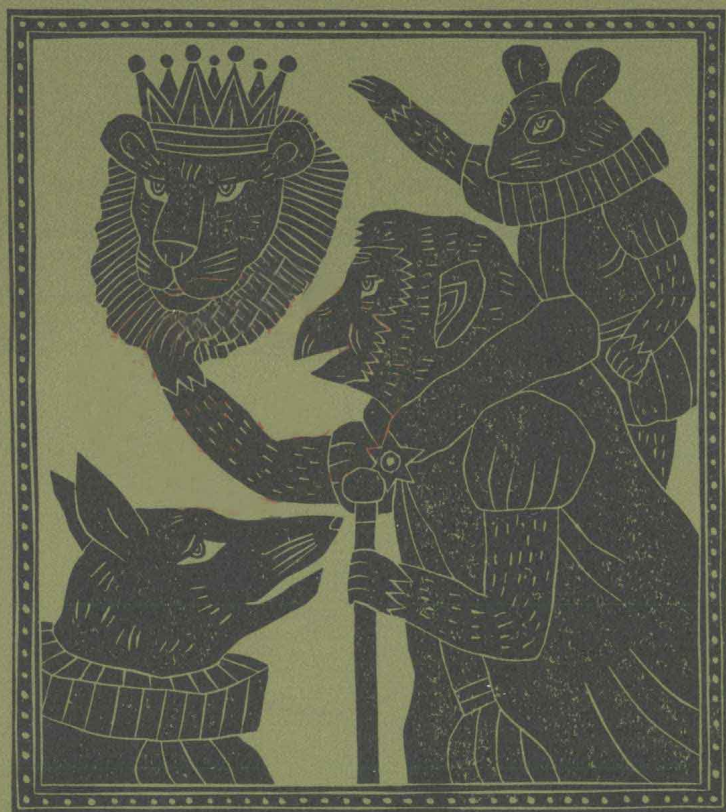




イノッブ三代目

小牧近江



第三文明社

イソップ三代目

昭和四十八年六月二十五日

初版第一刷発行

◎著者 小牧近江

〒二四八 鎌倉市稲村ヶ崎三一二二一

発行者 山崎善智

発行所 株式会社 第三文明社

東京都千代田区猿樂町二十五四

〒一〇一 TEL(二九四)八七三二(代)
振替 東京一七七八二三

印刷所 明和印刷株式会社

(乱丁落丁本がございましたらおとりかえいたします)

はしがきに代えて

——論語とラ・フォンテーヌ寓話

わたしが日本脱出に成功し、ハノイに着いたのは、第二次大戦がはじまる一年前であった。荷物をひらくと、中からひよっこり岩波文庫版『論語』が現われたのにびっくりした。論語読まずの、論語知らずのわたしだったからである。安南民族の生活にとけこむために、礼儀、信を守れとの、父のひそかな親心であった。

まもなくハノイで、わたしは『今日社』の連中と知り合った。若い作家、詩人、評論家などのサークルで、熱烈な民族解放のタネマキストたちであった。すでに初老のチャン・チョン・キム（陳仲金）はその家長的存在である。一九四〇年のクー・デタ（三九事件）後首相になった。

かれは温厚な人柄で、市民から深く敬愛されていた。この儒者は『新語論』を刊行したばかりであった。はしなくもわたしは、このモラリストと交わりを結ぶことになるうとは、思いもよらなかった。その後、若い運動家たちの何人かは、東京、台北、広東へ、そしてチャン・チョン・

キムはシンガポールに亡命したが、追われる身のかれのすすめで、わたしは当時順化^{フエ}に居住のゴ・ジン・ジェム（呉廷琰）と文通することになった。後の大統領である。

終戦後、わたしたち在留人は、内地に送還されることになったが、ハイフォン港から乗船の際、所持品の点検があった。わたしたちは待合所の床に土下座して、縁日商人よろしく、めいめいのガラクタをならべさせられた。順番がくると、わたしの前に重慶の憲兵が立った。ういういしい兵隊さんであった。ひとわたりわたしの携帯品を見まわし、目にとめたのか、金にしては一文の値打ちのない、十円だったかの小冊子であった。ハノイに置き去りするにしのびず、持ち帰った文庫版『論語』であった。青年憲兵はしっとわたしの顔を見つめた。敗戦後めつきりふえた私の白髪頭にひかれてのことだったろうか。かれはこの小冊子を手にとり、ページをめくったが、日本字は読めない。しかし、日本語であろうが、中国語であろうが、『論語』であることに変わりがなかった。かれは、おずおずとそれを「ゆずってくれまいか」という素振りで金を出しかけたので、わたしは「記念に差し上げます」というジェスチュアをすると、安心をしたように顔をほころはせ、あとは調べもせず、すたすたと立ち去った。お札をのべたいのは、こちらなのだ。地下の父は喜ぶことだ

ろう。ハノイにおけるわたしの『論語』の遍歴なのである。

このとき、若い憲兵が目もふれなかった私の所持品の中にアシエツト版『ラ・フォンテーヌ寓話』があった。あまねく知られているルネ・ラドゥワンの解説本なのである。ラドゥワン先生はわたしの恩師である。パリのアンリ四世校中等科の国語の担任で、わたしは先生からフランス古典文学の手ほどきをうけた。六十年前の話である。

小柄できびきびした、しかし温顔のラドゥワン先生は、自分の教室に、教え子たちのための文庫をもっていた。それは生徒たちの読書力をそえるためだったが、実は生徒たちめいめいの性格に少しずつ新しく伸びる芽をふかせたいのがねらいでもあった。腕白な子には情緒的なものを、柔弱な子には勇気をふるいたたせるものというふうに、先生ご自身で本を選び、あとで「どうだった」と生徒たちにきかれた。

わたしに与えられたのは、フランスの子ならだれでも棒暗記できる『ラ・フォンテーヌ寓話』であった。わたしは、「なんだ『イソップ物語』じゃないか」と思ったが、それが詩で書かれているので、解説にとまどった。わたしはそのことを正直に先生に訴えたと、ラドゥワン先生はやさしく「お前はよく勉強した。字句のむずかしさはフランス語が上達すればわかるようになる。文章の中の含みは、五十年たてば自然にわ

かる」といわれた。

五十年たったら、日本は敗戦国になったのを、わたしはハノイで知った。うつうつとした毎日であった。ふと、その昔ラドゥワン先生のいわれたことばを思いだした。「五十年たてば自然にわかる」。わたしは先生の『ラ・フォンテーヌ寓話』を胸にいだいて故国に帰ることにした。あれからさらに四半世紀たったが、いまでも折にふれ、それを読んでいる。いま手もとにある訳書は、克明に訳され、格調高い市原豊太訳『ラ・フォンテーヌ寓話』（白水社版）、読んで愉しい絵入り版窪田般弥訳『ラ・フォンテーヌ寓話』（社会思想社版）、それにこんど刊行されたなめらかな訳文の今野一雄訳『寓話』（岩波文庫、上下二巻）、それぞれちがった味わいのある本である。

ラ・フォンテーヌは孔子のような聖人ではなかった。いわば俗人である。快樂的な詩人だった。しかし、ルイ太陽王の御代にあつて、心の底に絶対権力にたいする反発精神がひそめられていた。長いものに巻かれることに、じっとしておれぬ寓話詩人であった。

強者の屁理屈には勝てない（「狼と山羊」）

とどのつまり、沢山の小大名に頼るより、

超大名に信頼し、身をまかせるのが上策（太守と商人）

平和、それ自体まことに結構、異論はないが、

相手に誠意なくては、なんの役にもたたない（「猿と猫」）

なるほどラドウワン先生のお教えどおり、五十年たって『ラ・フォン
テーヌ寓話』の含みを『自然にわかった』わたしである。

（「本との出会い」より、『毎日新聞』一九七二年一月十九日付）

イソップ三代目Ⅱ目次

はしがきに代えて	1
ラ・フォンテーヌの生家	11
ラ・フォンテーヌの青春	21
フーケとコルベール	27
ラ・サブリエール夫人のサロン	35
寓話の先達たち	42
奴隸イソップ	54
イソップと蟻の話	67
イソップと少納言	76
ラ・フォンテーヌとスウィフト	84
獅子の宮廷	92
重臣たち謎の怪死	103
ヴェルサイユ宮の「戦争の間」	115

戦争と平和 121

ラブレーと戦争 141

ラ・フォンテーヌと女ごころ 147

略年譜 160

ラ・フォンテーヌのことば 164

我流ラ・フォンテーヌ 171

いつでも、どこでも、というもの

無心というもの

アマチュアというもの

コトバというもの

身から出たさびというもの

あとがき 208

小牧さんのこと 211

蘆原英了

装帧
版圖

原田
維夫

イソップ三代目

亡き妻に

ラ・フォンテーヌの生家

ラ・フォンテーヌの『詩で書かれた寓話集』（巻ノ一―巻ノ六）が公刊されたのは、一六六八年である。かれが四十七歳のときであった。動機はわからないが、その序文に「わたしの寓話にしめされた方々の寛大さからして、この第一集にたいしても同じご好意を期待したい」とあるのを見ても、ラ・フォンテーヌに発表の自信ができたからだったろう。

『寓話を詩で書く』ということとは、古典文学隆盛の時代にあつて、冒険だったにちがいない。

ラ・フォンテーヌが寓話詩の出版にふみきつたのは、かれがながい間篋底きょうていに温めていた詩稿が、文学同好の士のあいだに回覧されていたせいだろう。おそらくそれは、かれの青春時代からの文学の友、詩人フランソワ・モークロワ（一六一九―一七〇八）、文士アントワヌ・フルティエール（一六一九―一六八八）、すでに『詩論』を発表していたボワロー（一六三六―一七一一）や雄弁家の弁護士で文学者のパトリュ（一六〇四―一六八一）などの仲間だったろう。

世は絶対王政の御代であった。いいつたえによると、ルイ十四世は、

一六六八年のある日、王政抵抗派の牙城パリ高等法院にあらわれ、フロンドの乱の関係書類を手ずから破りとり、ことばも荒々しく叱咤した。「貴族たちよ、諸公は国家は自分たちのものであると考えていたのか」。まさにその瞬間、あの有名なことばが王の口から吐きだされた。「国家、それは朕である」。

ここでは寓話詩に動物たちを登場させた一介の詩人ラ・フォンテーヌがのりだしたとする。

「古典文学者諸君よ、諸公は寓話詩は文学でないと考えていたのか」。

「寓話詩、それは余である」。

おなじ年の一六六八年の出来ごとであった。

話を、ラ・フォンテーヌの「生まれた家」からすすめてみたい。

一九五六年夏、ロンドンのペン大会に出席したわたしは、パリに立ち寄った。目的のひとつはここから七十キロ離れたシャトー・ティエリにラ・フォンテーヌの生まれた家を訪ねることであった。

それは明るい、小ぢんまりした小邑で、マルヌ川が二股に分かれ、ゆるやかに流れていた。むかし、橋桁が九つもあったがそれが崩れかけた

ので、その改修を促進させるため、ラ・フォンテーヌは当時飛ぶ鳥をも落とす権勢家フーケに吟唱詩を呈した（一六六〇年）。フーケは大蔵卿であつた。

ここ十年、いかなることか

唄え、狂えのマルヌ川

怒りの姿みるもあわれ

橋の正面あたりにラ・フォンテーヌ広場があつた。城址はこんもりと茂つた丘の上にある。メロヴィンガ王朝最後の前の王チエリ十四世は、権慾の権化、管領シャルル・マルテルによつてこの城塞に幽閉されたと伝えられる。そこで「チエリの城」が「シャトー・ティエリ」の起こりとなつたといわれる。

ジャンⅡド・ラ・フォンテーヌの家は、広場からほど近い城壁跡の下にあつた。かれは一六二一年七月八日、ここで生まれた。いまは町の『ラ・フォンテーヌ記念館』になつてゐるが、お粗末なものであつた。

親ゆずりのこの屋敷が親戚に買いとられたころ（一六七六年）家は瓦屋根で、二つの翼の突き出し塔のある風雅な邸宅であつた。前庭は壁の堀根で、

でめぐらされ、馬車の出入口があった。いまはその面影、跡形もなく、塀は殺風景な鉄柵にかえられ、昔の名残りをとどめるものといえ、百合の花を飾りにあしらった優雅な正面の門だけである。門柱に「一五五九年」と刻まれている。

玄関の入口に愛想のいい小肥りの老案内者が待ちうけていた。総じてこうした人たちは、決して厭きあきした顔をみせない。そのほうが損をしないからだろう。同じ説明をくり返していればよいのだ。

参観人のほとんどが外国からのお上りさんといってよかった。夏の休暇を利用してはるばるアメリカからやって来た女教員らしいグループもあった。眼鏡をかけている婦人が多かった。

館内は肖像画、書簡、書籍でいっぱいだった。それを一つひとつ調べていたら、なん日かかるかわからなかった。団体旅行者たちだったので、そろそろついて行けばよかった。羊の群れとでもいえようか。だが、道草する暇がなかった。先を急ぐから。

案内者は部屋がかわるたび、一応説明してから『寓話詩』を朗誦しはじめた。みんながみんな、フランス語がわからないか、苦手らしく、退屈しはじめた。それが、なんどもなんどもつづくので、欠伸をかみ殺すものもあった。